

**立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）**

**大学院学生研究**

**2015年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院	文学	研究科	日本文学	専攻		
<b>研究代表者</b> (2016年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年		氏名				
	文学研究科・日本文学専攻・博士課程後期課程2年		湯本 優希		印		
<b>指導教員</b>	所属・職名		氏名				
	文学部・教授		金子 明雄		印		
<b>自然・人文・社会の別</b>	自然	・ <input type="checkbox"/> 人文	・ 社会	<b>個人・共同の別</b>	<input type="checkbox"/> 個人	・ 共同	名
<b>研究課題</b>	明治期における美辞麗句集の研究—その生成過程を中心に—						
<b>研究組織</b> (研究代表者・共同研究者) ※2016年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・学年		氏名				
	文学研究科・日本文学専攻・博士課程後期課程2年		湯本優希				
<b>研究期間</b>	2015 年度						
<b>研究経費</b> (1円単位)	(支出金額) 200,000円 / (採択金額) 200,000円						

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、明治期における美辞麗句集について、美辞麗句集の例句・例文集という特性に鑑み、検証することを目的とする。明治29年に大町桂月・塩井雨江・武島羽衣による合著『美文花紅葉』が刊行されたことに端を発し、美文作法書や文範書、美辞麗句集等が数多く刊行された。これらは明治期に流行した作文という文化をかたちづくる上で重要な役割を担っていたといえる。その中の美辞麗句集には同時代の紀行文や名所案内といった叙景文に数多く見られる美辞麗句が採録されており、美辞麗句集と叙景文は相関関係にある。そのため叙景文から抽出した自然描写に関する美辞麗句について比較検討し、美辞麗句の展開や採録経緯について考察を行った。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 日本近代文学 } { 美辞麗句 } { 文学表現 }

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

明治 29 年に博文館より刊行された大町桂月・塩井雨江・武島羽衣による合著『美文花紅葉』に端を発し、「美文」は流行したとされている。美辞麗句集の中には渡邊直政編『美文美辞麗句』再版(大学館、1901 年)のように、その書名に「美文」を冠し、美文を書くための資料集であると銘打たれているものも多く見られる。また、美辞麗句集には、梅泉先生『美文紀行作例』(小川尚栄堂、1901 年)や野沢潤編『千景色記事紀行文』(岡本偉業館、1904 年)などのように「紀行」の名を含むものも散見される。美辞麗句集は、作文に際して、描こうとする対象物ごとに項目が立てられており、それらを表現する美辞麗句が列挙されるという体裁が一般的である。この項目においても、「山」や「水」といった自然描写に関するものが多数を占めているものも少なくない。これらの実際の資料から、「美文」と「紀行文」がともに「美辞麗句」を含む文章であるという点において近接していたことは明らかであるといえよう。このように美辞麗句集に採録された美辞麗句表現は、「美文」と「紀行文」という文章ジャンルを越境していたのである。

本研究では、これらの美文や紀行文に共通する〈風景描写〉における美辞麗句について精察すべく、『文芸倶楽部』に掲載された紀行文や名所案内といった叙景文に関する調査を行った。『文芸倶楽部』は明治 28 年 1 月に博文館より創刊された文芸雑誌である。同年同月に同じく博文館から総合雑誌である『太陽』が創刊されており、『太陽』には、創刊の時点で「地理」欄が設けられ、紀行文や名所案内がそこに掲載されていた。同時期には、明治 22 年 2 月に創刊された『風俗画報』(東陽堂)が、明治 30 年 5 月の第 140 号より「地理門」という項目を新設している。さらに、『淑女』では明治 32 年 5 月に「地理」欄が、『中央公論』では明治 34 年 1 月に「紀行」欄がそれぞれ新設されるなど、明治 30 年前後において、各雑誌では、地理・紀行に関する欄が次々と新設されているのである。ここから各地の風土やそれらの描写に関心が高まっていたことが看取できる。『文芸倶楽部』では創刊当初こそ『太陽』との差別化をはかってかこれらに類似した欄はないものの、のちに「勝地案内」欄が登場するに至る。本研究では、この『文芸倶楽部』における叙景文から美辞麗句表現を抽出し比較検討を行うことで、文芸雑誌における美辞麗句表現を検証した。

『文芸倶楽部』では、明治 32 年 4 月号において、「避暑地案内」欄の新設に際し投書を募集する呼びかけが誌面に載ることとなる。その内容については「○温泉場○海水浴場○山水の風景○土地の便不便○宿泊料の概略○名所旧跡○旅費(何処より何処までといふ概算)○飲食物の便不便等 尤も有名なる所にてても、あまり世に知られざる特色と思し召すものは御斟酌なく仰せ下され度候」と記されている。これに続き、同年 8 月号において「本誌の避暑地案内は本号限りにて撤去し、次号よりは更に『勝地案内』なる一欄を設く今や汽車汽船の便大いに開け、従つて旅行者の頗る多くなりし時、此欄の新設亦必要と存じ候」として「避暑地案内」の募集内容を引き継いだ投書募集が掲載されている。美辞麗句が数多く見られる叙景文の投稿欄はこのように当時の交通機関の発展に基づいた、各地の名勝を描くという需要に供するかたちで開始されており、美辞麗句は全国各地の地勢・文化を文章によって紹介していくという動きと深く結びついて発展したといえるだろう。

『文芸倶楽部』における叙景文では、数多くの美辞麗句表現が確認された。まず、とりわけ多く見られたものは以下である。「赤間福間の辺にいたれば、一帯の根丘すべて此れ矮松、幹は老ひ枝は低れて靄々たる翠色滴らむとし、風致掬すべし。(春山鶴峯「鎮西めぐり」明治 32 年 7 月号)」「翠色滴らんとせる一大老松あり、『由縁の松』と云ふ、(来往生「由縁の松」明治 34 年 4 月

**研究成果の概要 つづき**

号)」これらの、「翠色」や「翠緑」などが使用されている「翠色滴る」は、主として松を表現する美辞麗句として著わされていた。さらに、水の様子についての美辞麗句では「遠近の山は低く高く蜿蜒波瀾の状をなし銀蛇の如き大井川此間に流れて(不識庵聴秋「秋の旅」明治 32 年 12 月号)」「迸発せる水流は、宛然銀蛇の邁奔するに似て、(木村小舟「東濃の仙区(承前)」明治 37 年 6 月号)」などが確認できた。このように、風景を描写する際に、定型句である美辞麗句は数多く用いられており、それは翻っていえば、全国各地の勝地に関する紹介の文章が募られた場合に、どのような景色を〈名所〉と捉えるかという点において、このような定型化された美辞麗句を用いることができる〈風景〉こそが〈名所〉だとされ、投書に結びついたといえるのではないだろうか。

さらに、『文芸倶楽部』における美辞麗句表現として考察を試みたいのは、以下のような表現である。

岩尾の瀑布は、一に観音の滝ともいふ、固防国玖珂郡神代村に在り、天神山の半腹より落ちて瀑布をなす、高さ二丈、幅二間余、

この「高さ二丈、幅二間余」との表現は、正確な数値である印象を受ける。これは明治 32 年 5 月号「避暑地案内」の白菊「岩尾の瀑布」の一節であるが、『文芸倶楽部』の叙景文では、この頃より道行き案内として目的地までの距離が記されるといった数値ではなく、〈風景〉そのものを数値化して描写する試みがきわめて多く見られる傾向にあることが明らかになった。こうした数値による表現は「勝地案内」欄の新設の頃より見られ、このことから、「勝地案内」欄に紹介するにあたり、各地の特有の風景を他の名所と差異化し、正確な風景を読者に想像させることが重視されはじめたといえよう。しかしながら、この数値化によって、特有の風景を描くことができない定型句である美辞麗句が衰退したかといえばそうではなく、数値によって説明された風景には、必ずといってよいほどに、美辞麗句が付与されていたのである。また、一見対極のように見える数値化と美辞麗句であるが、美辞麗句集である中村巷『美文之資料』(矢島誠進堂、1898 年)に「幾個の峰巒は轟々として天を攢し、險峭断岫数千尺」とあるなど、壮大な情景を表現するための定型化された数値を含む美辞麗句もある。さらに、明治 37 年には坪谷水哉「耶馬溪＝対＝甲州御岳」のように、数値の大小のみに依った景觀の優劣がついてしまうことを疑問視する声もあがり、大幅に減じていったのである。このような動きは、美辞麗句という定型表現が特有の具体的な風景を描くことができないにもかかわらず用いられ続けていたことにも重なっており、それらがせめぎあっていた状況だといえるだろう。

さらに、『文芸倶楽部』には、「口絵説明」や「絵とき」という、写真が付された風景に対して説明を行っている文章が多数見られたが、それらには美辞麗句が散見される。そして、明治 32 年に刊行された、写真と紀行文が収められた大橋乙羽『千山万水』について『文芸倶楽部』明治 32 年 2 月号・3 月号「時報」に評が掲載された。ここでは乙羽の美文を「实景に遠ざかりて」と評しているものの、「所謂千山万水を紙面に幻出せしめて」と評価されている。同様に明治 33 年 1 月号には同書についての別の評も掲載され、その筆致が「幻術」と評されており、これらの評や写真に付された「絵とき」では、風景を「幻出」させる、美辞麗句表現という〈ことば〉の役割が認識されていたといえる。

『文芸倶楽部』における美辞麗句表現の変遷を見るに、美辞麗句によって著わされた叙景文は言語的な風景を構築するという役割を果たしていたといえよう。このことから、当時の美辞麗句が担っていた「幻出」という機能を再評価すべきではないだろうか。

※この(様式 2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式)を添付すること。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

①

湯本優希「美辞麗句によって「幻出」される風景——明治三十年代の『文芸倶楽部』を視座として——」  
『立教大学日本文学』115号、2016年、pp. 69-82

④

湯本優希「〈均される風景〉からの脱却——明治期の美辞麗句を中心に——」  
科学研究費・共同研究プロジェクト「日本のネイチャーライティングにおける交感表象の歴史的様相」  
第1回合同研究会テーマ「日本のネイチャーライティングの成立—明治30年代をメルクマールに」  
2015年8月6日(木)、長野

④

湯本優希「明治三十年代の叙景文にみる美辞麗句——「幻出」という機能をめぐって——」  
科学研究費・共同研究プロジェクト「日本のネイチャーライティングにおける交感表象の歴史的様相」  
第2回合同研究会テーマ「一次自然と二次自然の問題圏：ネイチャーライティングとトラヴェルライティング」  
2016年3月30日(水)、滋賀